繪島生島

島生島繪

舟橋聖一

新潮社

繪島生島

昭和二十九年八月二十日　發行
昭和二十九年十二月二十五日　二刷

定價　貳百五拾圓
地方賣價　貳百六拾圓

著者　舟橋聖一

發行者　佐藤義夫
東京都新宿區矢來町七一

發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)七一一一～八
振替東京　八〇八番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えします。

印刷・石福印刷株式會社　製本・大進堂製本所
Printed in Japan

目

次

お鈴廊下　七
幼君鍋松　三一
丹前役者　六〇
春の白魚　八八
菊の季節　一一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大紋行列　一四二
白酒賣　一七〇
奴遊女　一九六
山里御門　二二七

装幀・カット

結城素明

繪島生島

お鈴廊下

青い蔦が目に沁みる青さで、高い石垣を匍つていた。

平河門を入つたお初は、縁つゞきの諸星藤兵衛の背ろについて、見上げるような石垣と石垣の間を幾曲りもして歩いた。

何ンという美事な城壁であろう。こんな八帖敷もある大石を、一體、誰がどうして、運んだのだろうとお初は不思議な氣がした。

やがて、富士見櫓の見える下まで來た。

櫓の上の空は、紺碧に晴れている。あの櫓に上つたら、江戸中が一目に見えるだろうと思われた。

砂利を敷詰めたお城の道が、熊手の目も美しく、いつまでもつゞいて行く間に、下梅林御門、上梅林御門、御切手御門などと、いろいろな御門を、いくつ、くゞつたか知れない。そして、御門を通るたびに、いかめしい守護の役人に名を問われた。

「左京のお局様へ、新規お召抱えのお目見得女中にございます」

と、藤兵衛に教わつた通り、お初は棒讀みにして、答えた。

左京のお局と云うのは、徳川六代將軍家宣(いえのぶ)の第三の側室で、もとは京都安井御門跡(もんぜき)の諸太夫、勝田

帯刀と云うものの養女であつた。

やがて、鐵鋲のこまかく打つた黑門の前へ出た。お初は、オヤオヤ、又御門かと思つた。こんなに、いくつも御門があるのは、猥りに外部の人を入れまいとする要心だろうが、それだけに、一度お城へ入つた以上は、容易なことでは、出て來られないのだと思うと、何ンとなく、空恐ろしい氣もするのだ。

藤兵衛が、お檢番所の口へ行つて、何か話してから、お初のほうへ振り向いて、

「さて、こゝが長局へ入るお局御門じや、拙者は、こゝで、お別れいたすぞ」

と云つた。お初は驚いて、

「小父さまには、なぜ、この先きへは——」

「それがさて、お局御門から先きは、男禁制じや。が、案ずることはない。そなたのことは、先達、左京のお局様に、御錠口鈴川様を以て、懇ろにお話し申してござれば、そなた一人、參つても大事ないわ」

「心細うて、叶いませぬなア——」

と、數え年十八のお初は今にも、涙がこぼれ落ちそうな顏をしている。手には、色のあせた縮緬の風呂敷を一つツきりだ。藤兵衛は聲をはげまして、

「今更ら、何を云うぞ。そのような氣の弱いことで、何ンで大奥の、嚴しい御奉公が勤まりましよう。サア、よいか。その耳門を入つたら、御檢番所のお方のお指圖で、まちがえず、お廊下へかゝるのじや」

「はい。それでは小父さま——行つて參りまする」

案ずるより生むは易く、御檢番所でも別段のお咎めなく、お初はやがてお半下部屋の隅に控えるこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とが出來た。

通り廊下を往つたり來たりするお女中の姿が、まことに珍しかつた。江戸も下町からくると、まつたくの別世界である。

髪の形でも、

「かたはずし」

「もみじ」

「しのじ」

などと云うのは、お初は、子供の頃、芝居の舞臺で見たような氣がするだけで、現實に見るのは、はじめてであつた。

それに、お女中たちは、いかにも、ゆつくり、ゆつくりと、通り廊下を歩まれる。下々のように、そゝツかしい歩き方をするものは無い。これも、お初には、驚きであつた。そしてますます、心細いのである。自分には、あんな風に、悠容とは歩けそうもなかつた。その外、すべてのしぐさが、おちついていて、美事である。お半下部屋に控えているみすぼらしいお初の姿などには、目を吳れる風もない。丁度、お城の石垣が、自分を冷く見下していたように、お女中たちも、お初には、冷い人のように思われた。

お錠口の鈴川が入つて來て、「新參女中渡りもの」の覺えを讀み上げた。

一つ。鐵鍋大小。

一つ。一尺廻り行燈。九寸廻り行燈。

一つ。ぼんぼり。火かき。火箸。

一つ。大庖丁。中庖丁。薄刃。堺出刃。

一つ。五升入薬罐。
一つ。春慶茶だんす。木地茶臺。
一つ。しゆろ箒。ちり取。
一つ。摺鉢。肴鉢大小。摺木。塗杓子。大小炭取。たばこ盆。火打箱。
一つ。手洗。切桶。

お初はこんなに澤山の戴きものをして、若し、粗相をしたらどうしようと、心配にもなるが、また急に、物もちになつたのは、思いがけず嬉しかつた。

それから、お初は、新参入仕に際しての誓詞を讀まされた。

「御奉公の儀、實儀を第一に仕り、少しもうしろ暗きこと致すまじく候。よろづ、御法度のおもむきは、堅く相守り申すべきこと……」

と、讀むうち、お初は聲がふるえ、またしても、涙がこぼれそうになつた。

「奥方の儀、何事によらず、外様へ口外申すまじきこと……

「御威光を借り、私のおごりいたすまじきこと……

「好色がましきは申すに及ばず、宿下りの時分にも、物見遊所へは參るまじきこと……

「附けたり。部屋々々、火の元は念入り申しつくべきこと……

左京のお局に御目通りが叶つたのは、翌々日の午すぎだつた。

しとしと、絲のような春雨が、お庭を濡らしていた。はじめてお城へ上つた日は、あんなに美しく晴れていた空が、今日は灰色に垂れ下がつてお城の石垣も濡れている。濡れると、石垣はこんなにも美しい色になるのかと、おどろくほど美しい。

お錠口の鈴川が、先きに立つてお部屋へ入るにも、行儀作法は面倒だつた。お初は、一々鈴川のする通りに、その背ろに坐つて、手をつき頭を下げる。

今日から、この方を旦那様としてお仕えするのだと思うと、胸が轟いた。

「では、初音と云う名前をつけて上げましよう」

と、仰せられた。

「初音——まことに好い名前でございまするなア」

と、鈴川が相槌をうつ。

「ありがたい仕合せにございます」

そう云つて、面を上げるとき、お初ははじめて、左京のお局と視線を合わせた。お年のころは、二十七か八。色の白い、艶つぽいお顔立ちで、殊に目もとの涼しいのが、一目でお初の心に沁み入つた。こんな美しい方を旦那様にもてる自分は、大變な幸福者だと思つた。然し又、美しい方と云う者は、心の冷い者だそうだから、きつと、自分のようなはしたない女を愛しては下さるまい。左京のお局に仕える奥女中は、何人いるかまだ知らぬが、自分より、利巧で美しくつて、旦那様のお氣に入りが大ぜいいるに違いないから、その中へまじつては、自分なぞは、ものの數に入らないだろう。

「これ、初音。直々に旦那様から名前をつけて戴くなどとは、そちや、並々ならぬ果報者じや。そのつもりで、人一倍、忠勤をつくさねばなりませぬぞ——」

と、鈴川が云つた。

「はい」

初音は、坐つているだけで汗を流した。すると旦那様は、

「御目見得に上り立てほど、見るもの聞くものに、心の戰くことはない。それを鈴川のように云うて

は、若い者は、驚いて逃げ出したくなるが必定。私も昔は、覺えのあることじや」
と、却て執成して呉れた。左京のお局も、昔はお目見得女中として、大奥に上り、やはり、お半下から段々に出世して、將軍のお手がつき、今では御臺所に次ぐ權勢を占められたお方である。
「はじめてお城へ上つて、そなたはどう思いましたか」
と、旦那様がお訊きになつた。
「はい。櫓の美しさ。見上げるような石垣の高さに見惚れました。何ンと云う大きなお石を運んだものでございましよう」
「變つたことに驚いたものじやな」
と鈴川が笑つた。

左京のお局は、初音の云うことが一々面白かつた。それで、始終、
「初音——
初音——」
とお呼び寄せになつた。
朝、旦那様がお目をさますと、お中萬の豐梅がお手水をさし上げる。お手水がすむと、鐵漿をつける。それから御髪上げになる。
初音の最初の仕事は、このお役の御手傳いであつた。
鐵漿をつけるときのお楊枝は、お上り箸と云う細い箸の先きへ、麻をむしつて卷きつけたものを使うが、これをつくるのがお中萬の役である。また、鐵漿は、小さい枠火鉢で湯せんにしてわかすが、この鍋が銀。また、お角盥が二つ。これも銀。みな銀製のお道具ばかりなのには、初音は只々、驚く

のみであつた。
お含嗽のときのお湯へ、黄蘗の皮を煎じた汁を一、二滴、垂らすコツが、なかなか、むずかしい。ところが、旦那様は、それが大層上手だと云つて、ほめて下さつたので、初音は面目を施すことが出來た。
鐵漿のすむまでは、中年寄の江の浦が、旦那様のお顏の眞正面にお鏡をもつて捧げている役をする。ところが、江の浦は、もう六十の坂を越しているので、お鏡を持つ手がブルブル顫えて、思うように參らない。それで、一度だけ持つてから、すぐ、初音にわたすようになつた。
六十でなくとも、ついお鏡をもつ手が顫えるので、この役もなかなか面倒である。然し、初音はそれを立派に仕畢せた。
「初音が持つと、鏡が動かないから、鐵漿をつけ易い」
と、お賞めがあつた。江の浦は、それをよいことにして、鐵漿の鏡は、いつも初音にもつて貰うことにした。
鐵漿こぼしは、蓋つきの鐵の深い箱で、一杯になるのを捨てるのは、初音の役。また、鐵漿つけのときに使うお紙を、お流しものの樽へ入れ、下へさがつてから、火中にするのも、初音の役。
然し、美しいお方の齒を染めたうす紙を、ムザムザ火中にするのは、いかにも勿體ないことのように思われたが、これも長い仕來たり故、自分の勝手にすることは、許されなかつた。
斯うして初音は、人よりも早く、旦那様のお側に近付くことが出來た。江の浦が、病氣で、引退したのも、初音にとつては、出世の近道がひらけたようなものだつた。——白粉も昔は江の浦がお塗りしたが、この頃は旦那様御自分で、襟足までお塗りになつていたのを、
「初音。塗つてくりや」

と仰せがあり、それ以來、初音が白粉刷毛を取るようになつたのは、實に破格のことだつた。

將軍家宣の御臺所は、京都からお下りになつた近衞公の姫君であるから、さしもの公方様も、この夫人にはとかく御遠慮があつた。それで、初音が大奥へ上つた當座の兩三年は、御臺所と他の側室の間には著しい待遇の差別があつた。そのため、左京のお局に對しても、御寵愛が薄いように伺われた。

左京のお局附きのお年寄やお上﨟は、それが口惜しくてたまらない。何ンとかして、將軍の愛を、こちらへ向けようと一生懸命だが、當の左京は、何事にも

「御臺様
御臺様」

と、微意をつくしているので、嫉妬中傷はつきものの大奥にも、至つてのどかな平和な月日がつゞいていた。

このことは、むろん京都へも通じていて、

「江戸のお局の中でも、左京の御方とやらは、取りわけ感心なお人じゃ」

と、近衞公もお喜びなされたそうな——。

然し、初音の思うところでは、御臺様は高貴のお生れには違いないが、特にお顔立ちがすぐれているというわけではなく、御縹緻は十人並と申すところ。一目で人を惹きつけるところは、殆どない。下世話に云えば「箱入り娘」で、浮世の塵一つ付けずに御成人あそばしたのが、お値打と云えば云えるだけのものだ。

そこへ行くと、初音の旦那様はいかにも男好きのする艶麗な美人で、俗な言葉を遣うと、「垢ぬけ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com